

---

# metropolitan underground

丸岡 剛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

metropolitan underground

### 【コード】

N2563W

### 【作者名】

丸岡 剛

### 【あらすじ】

首都東京の地下で、人知れず人々の生活を守る者達の物語。

小刻みな足音と腰に提げた工具同士のぶつかる金属音が、トンネルに余韻を残して響く。ところどころ黒ずみ、無数に傷のついたヘルメットにつけたヘッドライトの光は、周囲の丸みを帯びた円形のコンクリートの壁を映し出す。だが、彼らの行く手はそんな光すらも吸い込まれるほどに深い闇の先だった。かび臭さと体にまとわりつくような湿気は、どしゃ降りの雨に濡れたかと思わせるほどの大量の汗をかかせた。走っている彼らにとってはなおのことだ。

「加藤！急げ！時間がない！」

色黒の働き盛りの男に喝を入れたのは、先を走っていた彼より少しばかり多くの年齢と、数知れない修羅場を潜り抜けた経験を持つ小柄な男だった。

「マジっすか！？俺、これ以上早く走るなんてマジ無理っす班長  
ー！」

「加藤先輩、いつつも偉そうな口きいてるわりには、大したこと  
ないですね。僕なんかまだまだ走れますよ」

歳に似合わぬ今どきの言葉で根をあげながら息絶え絶えに必死  
で走る加藤に、前を走るまだ少年っばさを残している男が冷や

「ガキ！うっせーぞ！なめた口聞いてっど頭かち割るんぞゴラア  
ー！」

「加藤、腰に道具をそれだけつけて走りながら、中嶋とそれだ  
け言い合えば十分だ、おまえこそ、その減らず口をたたくエネル  
ギーがあるんなら、もっと早く走れるだろう」

「う、ういーっす」

「加藤先輩、相変わらず班長には弱いつすね」

ゆるく登ったトンネルを3人はひた走った。やがてヘッドライト  
の光が、トンネルの終着点を照らし出した。

「班長っ。行き止まりですー！」

「焦るなガキ！」

途方に暮れて立ち尽くす中嶋の声に応えたのは加藤だった。

「そのあたりの壁に防水扉がある。そいつを開ける！」

「はい！」

中嶋が辺りの壁を見回すと、部屋のようになっていた空間の隅に、車のハンドルほどの大きさのハンドルのついた扉が目に入った。すぐにそれに飛び付くと、ハンドルを力一杯回しはじめる。

班長と加藤が扉のところへ駆け寄ってきたのはそれからすぐだった。

2人もハンドルを一緒に回す。

固くて中嶋1人ではゆっくりしか回せなかったハンドルが序々に緩くなる。

と、その時だった。彼らの頭上を上に向かって伸びるトンネルの向こうから、機械の動く重苦しい音と、それに続いてバケツに入った水を流したような音が聞こえた。

3人の動きが止まる。

「加藤…今の音…」

「班長…マジ洒落になんないっすよ…」

「な、何なんですか？2人も怖い顔して…」

音はみるみる近くなり、轟音と共に頭上を流れ下ってくるのがわかる。

加藤は迫りくる絶望的なごく近い未来に背筋が凍った。

「ぼーっとするな！ハンドル回せっ！」

班長が必死の形相で再びハンドルを回す。

加藤も息が上がるほど懸命にハンドルを回す。

「何です！何なんですか！？」

中嶋は訳もわからず2人の顔を見る。

その間も、轟音が頭上から迫る。

「回せ回せ回せ！」

扉からロツクが外れる重い金属音がした。

「開ける！急げ！」

加藤や班長に加え、中島もハンドルに手を掛けて引っ張る。頭上の轟音はいよいよ迫り、生温かい風が何かに押し出されるように吹き下ろしてくる。

重く金属の軋む音とともに、扉がゆっくり開いていく。

「中へ入れ！入ったら階段を駆けあがれ！後ろを振り向くな！」

「ういっす！」

「はいっ！」

一人が通れるほどに空いた扉の隙間を加藤、中島と続いて入る。加藤は班長の言葉通り、扉の向こうにあった螺旋階段を駆け上がる。

「班長！」

後ろで中島の声がした。振り返ると、班長は扉を中から閉めようとしていた。

中島が螺旋階段を駆け下りはじめる。

「中島！戻れ！」

加藤が叫んだ次の瞬間、班長が閉めようとしていた扉から大量の水がなだれ込んだ。

「うわっ！」

水は扉を吹き飛ばしたかと思うとみるみるうちに上がってくる。

班長や中島の姿は渦を巻く茶色い濁流に飲み込まれて見えない。

濁流は加藤に向かってぐんぐん水かさを増してくる。

加藤は必死になって螺旋階段を駆け上がる。心臓が破れそうなほど痛み、息が苦しい。

次の瞬間、加藤の視界が真っ暗になった。

俺・・・死ぬのか・・・

すべての感覚が遠くなり、間もなく何も感じなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2563w/>

---

metropolitan underground

2011年10月9日14時43分発行